



トルコ政府と徹底対決する革命的左翼 クルド解放闘争と固く連帯する『デブ・ソル』の戦い

92年4月、トルコ警察当局は、情報部MIT、対ゲリラ特殊部隊とともに「共同作戦」を組み、革命的左翼グループ『デブリミチ・ソル（通称デブ・ソル）』のメンバー11名を虐殺した。このニュースはトルコだけでなく、世界的に報道された。しかし伝えられたのは、ほんの一部にすぎない。虐殺された11名の葬儀に1万人もの人々が集まり、追悼デモをおこなったということなどは完全に黙殺されている。

4月17日（金）早朝、イスタンブール市内7ヵ所で一斉に「ゲリラグループ掃討作戦」が開始された。警察側は、マシンガン、手榴弾などを使用するなど、強硬なものであった。女性6名、男性5名が死亡。ほか6名（うち4名は女性）が負傷し、逮捕された。

ドイツ赤軍派(RAF)声明

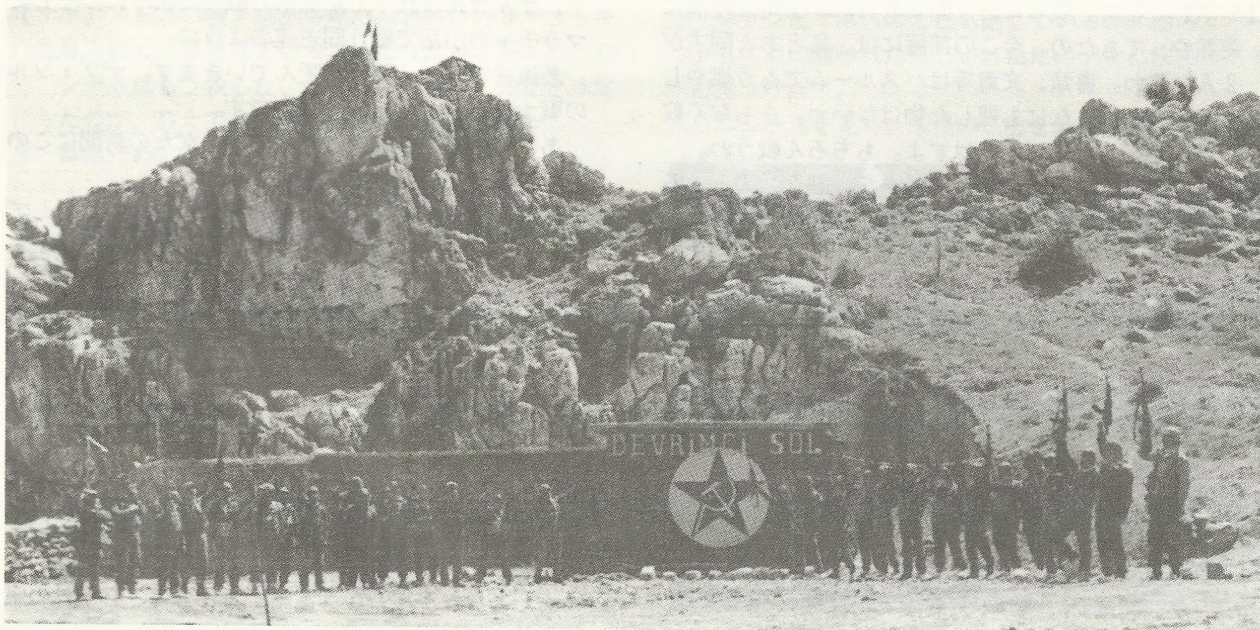
武装闘争の休止を宣言した4・10声明を補足する、ドイツ赤軍派(RAF)の6・29声明を掲載〔6ページ〕

この襲撃の際、報道テレビカメラが事前に配置されていた。そのカメラが映し出したものは、警察がデブ・ソルのメンバーを「逮捕しようと努力」していた様子であった。しかしその陰では「強硬突入、全員射殺」指令が実行されていたのだ。射殺されたメンバーの遺体には無数の弾丸が浴びせられ、ズタズタに引き裂かれていた。

また同時刻、北西クルディスタン（クルドの地）からは、クルド解放ゲリラPKK（クルド労働者党）とトルコ軍の激しい戦闘により37名が死亡、というニュースも伝えられた。

この二つの事件を通して明らかとなるのは、いかなる手段をもってしても運動を壊滅せんとするトルコ政府のその反動的姿勢である。もはや「逮捕、拘禁」などとしての攻撃ではなく、直接的な殺人攻撃が闘う者に対してかけられているのだ。トルコ国家の運動破壊攻撃は、闘争の最も高揚している都市部そして北西クルディスタンで強力かつ熾烈に加えられている。

トルコは、ヨーロッパ地域においてはECにリンクするかたわら、中東地域では湾岸戦争に加担するなどし、帝国主義による『新世界秩序』形成に向けての軍事的役



マラチャの山岳地帯でゲリラ戦を闘う、デブ・ソルの戦士達

割を積極的に担っている。その国内的展開として革命的左翼およびクルドに対して大攻勢をかけているのだ。

デブ・ソルあるいはPKKの闘いは「一部ゲリラによるものであり、民衆の支持など得られていない」などとするデマ宣伝を、トルコ国家は振りまいている。しかしながら事実はこれとはまったくの正反対である。

4月21日にとりおこなわれたデブ・ソルのメンバーの葬儀、追悼集会に1万人もの人々が参列したという事実を見るまでもない。葬儀を妨害せんとしていた警察は、阻止線をはって参列者を分断していたが、約80名がこれを突破し、遺体のおさめられている11の柩に駆け寄った。柩にはデブ・ソルの旗がかけられ、横断幕が葬列を取り囲むようにはためいていた。

このあと1万人が追悼デモにうつり、警官隊と衝突。警察は発砲したうえに、約2000人にもものぼるデモ参加者を逮捕したのである。



イスタンブール市内の道路を埋め尽くす
デブ・ソル等の革命的左翼、労働者市民の大デモ

〈ドキュメント〉 戦士達の戦い 虐殺された デブ・ソル戦士に捧ぐ

92年4月16、17日の両日、トルコ警察当局はイスタンブール市内で、デブ・ソルのメンバーのいたアパート各所をあいついで襲撃し、メンバー10名、シンパの女性1名の計11名を虐殺した。ゲズテペのアパートでは、メンバー3名が当局の特殊殺戮部隊を相手に8時間にもおよぶ戦闘をくりひろげた。

応戦中、メンバーはアパート内からTAYAD（註1）議長ファトマ・セセンに電話をかけ、包囲され戦っている状況を伝えていた。

以下は、その時の模様である。

最後のことば

0:20AM（女性の声）

【サボ】 私よ。奴らにとり囲まれたわ。1時間程前に突然やってきたの。今この部屋には、私とあと同志が2人いるわ。書類、文書等はバスルームでもう燃やしたから大丈夫。なにも残した物はないわ。まもなく奴らが攻撃をしかけてくるはずよ。もちろん戦うわ。

もうすぐニヤジ、アポ、ハイダル（註2）のところへ行けるのよ。私の横にいる同志があなたと話したいって言うてるから、今かわるわ。

【エダ】 私達はこれからトルコ人民のために、そしてデブ・ソル戦士としてこの身を捧げます。

心配しないでください。今はとっても落ち着いています。7・12戦士達（註3）やマラチャ（註4）、キジルデレ（註5）で戦った戦士達のように、勇敢に死をかけて戦います。最後まで戦って、笑顔で死んでいくことができるでしょう。

デブ・ソル万歳！

我らのリーダー、ドゥルスン・カラタス万歳！

我が武装革命コマンド万歳！

あなたと、そして全人民に永遠なる愛を捧げます。

【サボ】 TAYAD議長のあなたに今こうして電話し

ているのは、私達の最後の言葉を世界の人民に伝えてほしいからなの。いまから言う番号に電話して。

番号は×××××。あなたの電話は、いつでもこちらからかけられるようにしておいて。

さあ、いますぐ電話してきて。

シナン（註6）のことはもう聞いた？どうなったか知りたいの。調べてみて。

ちょっと待って…。もう一度整理して繰り返すわ。

私達のアパートは現在、完全に包囲されました。1時間程前からこちらにも応戦して、突入してくるのはなんとかくい止めています。すべての文書類は焼却処分しました。パスポートもです。まもなく向こうは攻撃を開始する模様です。もちろん戦います。同志ハミエト、オルカイ（註7）が都市で戦ったように。そしてマラチャの山岳で戦う同志達のように。

最後まで戦い、笑顔で死んでいきます。デブ・ソルの戦士にふさわしく、戦うのです。

あなたは私達の証人となって、あなたの新聞にこの言葉を載せて、全世界に伝えて。

私達の遺体は7・12戦士達のそばに埋めて、そして柩にはデブ・ソルの旗をかけて。仲間がきっと手伝ってくれるわ。そして残された家族を支えてあげて。

ひとまず電話を置いて、あとでまたかけるわ。こちらからいつでもかけられるように、回線は開けておいて。

1:20AM

【サボ】 シナンのこと、何かわかった？もう、電話した？まだ聞いてないの？奴らがシナンのことについて何だか話しているみたい。電話はあけておいてね。

もしあなたがどこかへ電話するときは、必ず外の電話を使ってね。

〔この時、銃声が電話ごしに聞こえてくる。〕

奴ら撃ちはじめたわ。聞こえる？

（電話を）切りましょうか？

【ファトマ】 いや、そのままにしておいて…。

【サボ】 ああ…。

〔スローガンを叫ぶ声が聞こえてくる。〕

デブ・ソル万歳！ ファシズム打倒！

我等の闘争万歳！ 7・12戦士万歳！

我々の死をかけた戦いに栄光あれ！

キジルデレの戦い万歳！

【サボ】 さっき言ったところに電話して。必ずよ。

〔連続した発砲音が響く〕

ごめんなさい、また電話を切るわ。

2:30AM -----

【サボ】 シナンのことはどうなった？ 何かわかった？
電話できたの？ 連絡先は2ヵ所あるわ。

奴ら、シナンを仕留めたと言ってるの。

〔後ろでエダの声〕

シナンを殺すなんて…。よくも…！

【サボ】 警察がひっきりなしにふざけたことをほざいているわ。私に向かっては特にひどいわ。

その言葉、そっくり奴らにお返しするわ。

聞こえるでしょ。

最初に奴らがやってきた時、ドアところで何て言ったと思う？

『税務署から来たんですが…』なんて言ったのよ。
そして『サバハット婦人にお話が…』だって。

〔銃撃音が鳴りひびき、スローガンを叫ぶ声。ドアベルが荒々しく鳴り、同時にドアをぶち破ろうとする音。〕

わが武装革命コマンド万歳！

ドゥルスン・カラタス万歳！

デブ・ソル万歳！

【サボ】 ドアの覗き窓から見たら、外は防弾チョッキで身を固めた警官隊でいっぱいだったわ。

シナンはもう殺した、と言っているわ。彼がどうなったのか、教えて。

電話だわ。

上と下から攻めてくるみたい。天井を壊そうとしている音が聞こえるもの。

〔銃声とともに、ドアをこじ開けようとする音…

警官がどなる声。『出てこい、売女ども！』〕

【エダの声】 さあ、戦車でもバズーカでもなんでも使ってドアを壊してみなさいよ。要するにデブ・ソルの部隊が怖いでしょ。死んだら夢にあらわれてやるから覚悟しておくがいい。呪い殺してやる。

さあ、入ってきやがれ！ そんな勇気もないんだろ！ たとえ私達を殺せたとしても人民からは逃げることはできないんだ。人民の正義の裁きから逃れることなんかできないぞ。同志達が必ずおまえたちに「判決」を下すわ！

〔ふたたび警官のどなり声〕

【サボの声】 おまえたちには親がいっぱいいるようだ

な。さしあたり、父親はブッシュ、母親はマヌキヤン（註8）ってとこね。

ドブはいずりまわるネズミのような奴らども！

よく聞かがいい！

革命的人民の正義万歳！

デブ・ソル万歳！

〔このあと銃撃音。ドアが壊されようとしている様子。応戦のために受話器を置くたびに『さよなら』と言っている。〕

【サボ】 奴ら煙突から催涙ガス弾を投げ込んだわ。

私達が今いるのは12階。警察はアパート全体が組織のアジトだと言っているわ。

今、ドアを壊そうとしている。ドアは鉄製だから、なんとももちこたえているけど…。穴を開けて突入しようとしているみたい。

・〔激しい銃撃〕

さよなら！ 同志達を助けに行かなきゃ。

〔銃声と、スローガンを叫ぶ声…〕

デブ・ソル万歳！

ドゥルスン・カラタス万歳！

クルド人民、トルコ人民の同志的連帯万歳！

クルド人民、トルコ人民は必ずファシストを打倒するぞ！

〔銃撃音〕

【サボ】 今、ドアをこじ開けられないように、バリケードで固めてきたわ。あと少しぐらい持ちこたえそうよ。

同志が腕をやられたみたい。

奴らはシナンを仕留めたと言っているわ。本当のことを教えて。どうなったの。

『おじさん』（暗号名一訳註）に電話して聞いて。彼は仲間だから大丈夫。奴ら警察は、このアパートの見取り図を見ながら話しているみたい。

シナンとケネスのことも話しているわ。他のアパートもすでに襲われたらしい。ただのデマに決まってると思うけど…。

ニュースを見て、本当のことを教えて！



虐殺されたデブ・ソル戦士達の肖像を掲げ

デモをする家族達

〔ふたたび銃撃音と、スローガンを叫ぶ声…〕

【サボ】 奴らドアを吹き飛ばす準備をしているようだわ。大丈夫、心配しないで。

〔警察の怒鳴り声。メンバーがこれに対しスローガンを叫んでいる。〕

死んだら、国中いっぱい私達の花を咲かせてみせるわ。

【エダの声】 デブ・ソルの旗は、この国のいたるところでひるがえるのよ。

〔警察がシナンについて話しているのが聞こえ、これに対しメンバーが叫ぶ。〕

【全員の声】 シナンを守りぬくぞ！我が同志は必ずお前たちに報復する。覚悟しておけ！

【サボ】 同志と一緒に反撃しなきゃ…。でも奴ら、いったいどうやってここを見つけたのかしら。どうやって…。朝、何も変わった様子はなかったのに…。何も思いあたらない。

とにかく書類、文書はすべて焼却したわ。パスポートもお金も燃やしたわ。もう必要ないものね。

ポケットにまだ何かあるみたい…。

とにかく処分しないと。何も残してはいけない。ちゃんとこのことも伝えて。もう何も残ってないわ…。

〔銃撃音、そして叫び声がひびく〕

聞いて。私にはここに2人の同志がいる。ともに勇敢に戦ってくれてるわ。

〔スローガンの叫び声、MP-5とG-3（ともにドイツ製のマシンガンと自動小銃。各国の特殊部隊で多用されている）の発射音〕

【エダの声】 人民は、奴ら権力のことなど信じはしない。奴らのウソは…（このあと聞き取れず）

【サボ】 人民は私達を支持してくれるわ。報道関係者を呼んできて。友達と会いたいわ。TAYADの仲間達を集めて。ここはゲズテペの気象センターそばのバクダッド通りの向かい側、カラス高層アパートよ。

警察でいっぱいだからすぐにわかるわ。

〔この間、何度となく途中で受話器を置いては応戦し、スローガンを叫ぶ声が聞こえる。会話を中断するたびに『さよなら！』と言うのだった。〕

腕をやられたみたい。貫通してる。でもなんとか戦

えるわ。奴らバスルームの壁を吹き飛ばそうとしてるみたい。

〔このあと爆発音。そしてスローガンを叫ぶ声〕

どうやら小さな穴しか開かなかったようだよ。でも、バリケードで固めてこなきゃ…。

〔そして家具をひきずる音。〕

奴ら、私がここにいることを知ってたみたい。シナンはもう殺した、って言ってるわ。イキズレルにあるアパートのことについて話している。そう、これは間違っていない。『おじさん』は確かにそこにいたもの。ねえ、ニュースを聞いて。

本当はどうなっているか教えて。

どうやったら仲間を助けてあげれるの。とにかくなぜこうなってしまったのか、わからない。朝は何事もなかったのに…。尾行もなかったわよ。

朝は何の異常もなかったのよ。きっと、それから何かが起こったのよ。いったいどうして、なぜ？

*のちに電話の相手であったファトマが語ったところによると、マスコミ関係者に連絡はとれたが、警察無線等を通して、警察の動きはわからなかったということである。警察がこの日、市内のアパート2ヵ所を襲撃し、最初のアパートでシナンを含む3名を、そして別のアパートで1名を殺害した、という事実は確認することができたそうである。

【サボ】 私達は落ち着いているから大丈夫。心配ないわよ。

血の最後の一滴がなくなるまで戦うわ。

〔警官隊に向かって叫ぶ声が聞こえる〕

【エダの声】 さあ、戦車でも大砲でもなんでも持ってきなさいよ。腰抜けども！

〔警官が彼女らをののしる声。言い返す声も聞こえてくる。〕

ドブネズミども！単細胞のゲズ野郎！

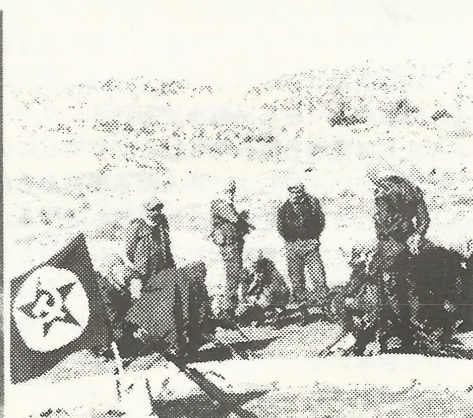
〔激しい銃撃音が連続〕

【サボ】 7・12戦士やマラチャの山岳で戦う同志たちのように、私達は死を恐れはしない。

ハルミットやオルカイのように、戦いのためなら喜んでこの命を捧げるわ。先に逝った同志たちのところ



虐殺された戦士達の肖像を書き込んだ旗を先頭にデモ



山岳の前線キャンプでのデブ・ソル戦士達

へ行くだけよ。

〔連続した銃撃音とスローガンを叫ぶ声〕

デブ・ソル万歳！ 7・12戦闘万歳！

キジルデレの戦い万歳！

ドゥスルン・カラタス万歳！

我らの闘争万歳！

闘争勝利！ ファシズム打倒！

デブ・ソル万歳！

ゲズテペ（註9）闘争万歳！

6:45AM（電話の音が途切れはじめる）

〔床を這って受話器までたどりついた様子。後にサボはこの時、足を撃ち抜かれていたことが判明。これから約1時間半後、表通りにいる人々に向かって叫び始める。しかしあまりにも距離が離れていたため、聞き取ることはできなかったということである。〕

【サボ】 この銃を手に、そして革命のスローガンを一杯叫んで、今、死んでいきます。

夫と（デブ・ソルの）リーダーによろしく伝えて。

そしてすべての同志たちにも…。さよなら。

7:15AM

〔このあとさらに銃撃が激しくなり、回線に雑音が入り始める。もはや彼女らの声は聞こえず、銃撃音のみが響いていた。〕

7:25AM

〔電話が切られる〕

註1. TAYAD

政治囚の家族連絡会のようなもの。91年、政府から「活動禁止措置」を受けている。

註2. ニヤジ、アポ、ハイダル

84年、獄中でハンスト闘争を展開。全員が死亡している。

註3. 7月12日

91年のこの日、イスタンブールでデブ・ソルメンバー12名が、権力の手によって虐殺された。

註4. マラチャ

92年3月、この地で5名のデブ・ソルメンバーが虐殺された。

註5. キジルデレ

THKP/Cの幹部らが虐殺された村。

註6. シナン

デブ・ソルのリーダーのうちの一人。

註7. ハミエト、オルカイ

デブ・ソルメンバー。イズミールで虐殺されている。

註8. ゲズテペ

イスタンブールの団地密集地区。



ケルン（ドイツ）、デブ・ソルの旗を掲げデモをするトルコ人労働者

〈解説〉

デブ・ソルはトルコの革命的左翼運動の中でも、最も戦闘的な闘争を行なっているグループの一つである。

山岳ゲリラとして軍事作戦を展開するだけでなく、都市部においては都市ゲリラとして武装闘争を戦い、トルコ国家と全面対決している。また労働組合などの基盤もしっかりと固め、トルコ人民の広範な支持を受けつつ活動しているのが特徴である。国外代表部設立など、西ヨーロッパを中心にトルコ人労働者、移民らの側面支援も受けている。この他、クルディスタンで戦うクルド労働者党（PKK）、クルド人民と固く連帯し、ともにトルコ国家打倒の戦いをくり広げている。

デブ・ソルは92年初頭、次のアピールを発表した。

「『法』の名のもとトルコ人民殺戮に手を染める警察、司法当局者に対し、再びくり返して警告する。トルコ人民や我々の同志への虐殺、拷問攻撃を今後も続けるというのなら、そのオトシマエをつけてもらわねばならない。過去の軍事政権の『遺産』を代々受け継いできたトルコ治安当局、国家保安委員会MGKには今こそトドメを刺さねばならないのだ」

このアピールをもって、警察、司法当局などの国家機構に対して武装攻撃を連続的に敢行し、権力にダメージを与えた。以下はその一部である。

○92年2月2日／イスタンブール

武装攻撃により警察官僚1名、警官4名が死亡。

○2月6日／イスタンブール

国家治安法廷検事ヤサル・グニャインを処刑。

○3月9日／イスタンブール

治安警察本部に対する爆破攻撃。警官4名が死亡。

（8ページへつづく）



ドイツ赤軍派(RAF)

6・29声明

ミュンヘンサミットに対する抗議デモ・集会に
参加したすべての闘う仲間へのアピール

まずもって、この抗議デモ、集会に注がれた事前の準備と努力を打ち砕かんとする警察当局の厳戒体制とマスメディアによるデマキャンペーン攻撃下、これらを突破して本日のデモ、集会に結集された仲間に敬意を表し、若干のアピールをおこないたい。

さまざまな闘争現場や、個々抱えている別々の課題にもかかわらず、人民支配と自然破壊を貫徹せんとする資本、権力によるG-7世界支配システムの下にあって、人民の生活の解決を共に追求していくことが今、必須の課題となっている。

「帝国主義支配 500年祭」に反対の声をあげるため、今回デモや集会、あるいは連日の行動をもって闘うことを選択したことは正しいことであると思う。闘争の歴史、そして精神は、今もって我々、抑圧された者のうちにあるのだということが今回の行動で一層明らかとなったのだ。人間生活と自然を、資本主義の「道具」として価値づけるこの帝国主義支配システムが存在する限り、必ずこの支配から社会を解放する闘争も同時に存在しているということを忘れてはならない。

人間の尊厳を否定し、抑圧にもとづく人種差別的、性差別的構造がいかなるところで現出していようと、精神的尊厳の解放をめざす闘いは、必ずや遂行されることであろう。

この共同集会は、他の仲間との経験の交流、あるいはそれを学び、共同の戦術をもって協力を開始することなど、多くの可能性をもたらすものである。

現在の状況は、単にこの場のものとしてではなく、国際的な観点からも具体的な共通のゴールや諸要求を獲得するためには、非常に重要な局面であると認識している。ミュンヘンで、リオで、ロサンゼルスで、マプートで、あるいはパレスチナやクルドで人民や自然への支配を貫徹せんとする支配権力に対する闘いとして、我々がいかなるステップを踏み出すのか、また全世界的な破局へと向かうこの状況をいかにくつがえしていくのかということ我々は提起していかなければならない。

下からの領域獲得のプロセスは、具体的な闘争のうちに、そして支配権力の必要とするものと対立して人民自身が本当に必要とするもののうちに創出されてきたのである。これは例えば、生活空間を勝ち取るための闘いであり、破壊的かつ無味乾燥な労働に対する闘いであり、環境破壊に対する闘いなどであった。そしてこれは獄中闘争、難民支援運動の組織化や反ファシズム運動の構築

に向けた闘いであり、さらには植民地人民の搾取によって利潤を得てきた帝国主義諸国家に対し債務支払いの拒否と補償をつきつけていく闘いでもあった。

ここドイツにおいて、我々にはこのプロセスの責任が大きいのしかかっている。ドイツが莫大な破壊力をもつ国家だからである。支配権力は国内的には、人種差別主義者の動員や難民に対して日常的に加えられている戦争攻撃をもって反動的な状況を出せしめてきた。支配権力にとって、ドイツの「男性意識」をいっそう強化するための、そして日々悪化の一途をたどって絶望的生活状況に追いやられている人民に対する「安全弁」として、この反動的状況は不可欠のものであったのだ。これは、権力が、そのスーパーパワーポリティックスを思うがままに操りたいがためのものでもあったのだ。今日、東欧に流れ込むドイツマルクが、明日には軍靴となるのだ。ドイツは日本に次ぎ、世界でも最も強力な経済力を有している国家である。ドイツ資本の力は強大である。

今回の闘いに、国境を越えてやってきてくれた仲間たちに、我々はこの声明をもって、我々の4・10声明（いわゆる非エスカレート宣言）における若干の点を明確にしておきたいと思う。

我々は他の国で闘い抜かれている武装闘争に疑問をもちはない。我々の深遠な連帯といったものは、全世界で自由のために闘う者すべてに向けられている。それは特定条件下におかれた彼ら、闘争を闘っている者自身が決定することであり、これが意味し、形成する闘争とは、闘いは一定の観点からなされなければならないということである。

仲間のすべてに対し、ここで我々の歴史を若干ながら語りたい。

※

※

我々RAFは70年代初期、世界的なベトナム反戦運動の中から登場した。ナチの過去に対しての広範な社会的議論など存在せず、元ナチが今もって権力中枢や財界内部に君臨する一方、共産主義者、反ファシズム運動活動家が監視下におかれ、ファシズムの過去と闘わんとする者には容赦のない弾圧が加えられるこの国ドイツの、いわゆるアウシュビッツ体制以後の状況にあって、多くの人々が参加した「68年の反乱」の中から我々の闘いは開始されたのである。

この暗鬱とした窒息状態にあるドイツ帝国主義下の現実に対して、新たな解放と反資本主義の生活手段を求める闘いが、世代を越えて存在している。例えば学校や大学での基本的な民主構造の構築、核家族というものに反対しての共同体での生活、社会あるいは左翼内部に根づ

いている伝統的な女性への抑圧構造と役割づけといったものに反対する女性の組織化などである。

ベトナム戦争当時、ベトナム人民に対するアメリカによる虐殺戦争において、ドイツは最も重要な役割を担っていたといっよい。我々はアメリカ帝国主義に対する全世界的な抵抗闘争の中に位置していた。

この時、南の民族解放闘争との関係を確保したのがソ連の存在であった。このような全世界的な諸情況の結果から、我々は国際反帝解放戦線の一翼として、独自のラディカルな闘争を展開したのである。これが自由を獲得し、全世界で同時的に闘われていた闘争を遂行していくための我々の確固とした展望であったのだ。

70年代の終りまでに、帝国主義側が、これら解放闘争の前進を封じ込めることができたときでさえ、我々は何ら方針を変えはしなかったし、80年代半ばまで同様のままこれを継続してきた。十月革命以降の歴史の変革を目的として、80年代において我々は、帝国主義の巻き返しを阻止するために実力闘争を展開した。我々は自らを再び強化することを望んだのだ。

我々の22年間におよぶ闘争史のさまざまな局面において、我々は帝国主義戦略、アメリカの政策、NATO、西欧ブロック、ワールドパワーポリティクスとしての大ドイツ帝国の出現、「新世界秩序」と闘う都市ゲリラとして、独自の役割を担ってきた。

西ドイツによる東ドイツの併合が現実のものとなった89年の末までに、十月革命とともにじまった歴史の全局面は終りを告げることとなってしまったのである。にもかかわらず我々はこの討論を、そして我々自身の（強く、そして弱くもあった）闘いの歴史の討論をイニシアチブをとってすすめ、新たな方向性を打ち出すに至ることはできなかった。

みずからの行動をもって我々は、下からの反権力の闘いの創出、そして社会矛盾を極限まで増大させて新たな闘いの必要性を喚起する、現在をとりまく情況に関する討論や、その中で新たな方向性を模索していくことを開始した。にもかかわらず、権力なき状態のビジョン、そして我々が提起すべく探しもとめていたはずの、まさにこれらの人々を取り込んでしまった資本側の勝利を拒否していくことのビジョンといったものを我々は突破する



サミットに反対するデモは
権力の弾圧をはねのけて貫徹された

ことができなかったのである。

これは我々の最後の作戦となったローベダー暗殺（訳註）などを見ても明らかである。この作戦のうちに、我々は東ドイツ併合以後の全く新しい社会情況を迎えたのである。それが目指していたゴールとは、旧東ドイツへの資本主義の進撃を阻止し、この地において闘っている人民との関係性を構築していくことであった。2つの異なった現実の闘争の中から、そしてこれまでの経験を充分生かし、他の色々な歴史に理解を深め、それに学ぶという共同闘争の視点に到達するところから、反権力が構築され前進していくのだということを我々は確信した。

もちろん多くの人々が我々の行動を支持してくれたということを認識してはいるが、これらの行動が討論のきっかけとはならなかったし、組織的に何ら獲得されたものではなく、支配権力を追いやることすらできなかった。

このようなすべての諸要因から、我々は新たな出発点にたち至らなければならないのだということを認識したのである。

変革へのプロセスといったものを発展させるための新たな思考へ、そして提起へと到達するための新たな基盤作りの作業や方向性をめぐる広範な討論が我々には必要なのである。この取り組みの開始は、再び同じ誤りを繰り返さないためだけでなく肯定的な結果を獲得するために、我々自身の歴史に学んでいくということでもあるのだ。

ドイツからの武器と金がクルド人民への戦争攻撃を激化させている中、我々の発表した4・10声明は状況を全く認識していないと指摘する仲間たちが存在することも我々は承知している。

大ドイツ帝国の政策に対する、内部から、あるいは外部からの闘いは絶対的に必要であり、これが単に討論のプロセスだけのものに限定されるべきものではないということに関して疑問の余地はない。

しかしながら、現段階において我々は武装闘争といったものが、このプロセスを進展させるものではないと感じているのである。新たな出発点を提示していくために、我々には共同の深遠かつ基礎のしっかりした討論が必要である。

世界的な諸変化は、世界的な分裂状況を内包しているからこそ、資本によって「無用」の刻印を押された者やもはや存在する意味のなくなったとされる者、あるいは抑圧的な生活の現実に関じ込められている者など、これら以前にもまして増加しつつある人々を前にして我々は、我々の変革へ向けたプロセスのためのまったく新しい基盤を構築することが必要であると判断するのだ。

今日この場において、我々にとって主要な問題とは、いかにしてここ大ドイツ帝国で崖っぷちに追いやられている人々、あるいは人間的基準を基盤とした新たな社会的現実性を追求する人々や、資本主義的価値とイデオロギーを拒否する人々を巻き込む形で、下からの反権力のうねりをつくりだしていくかということである。

資本主義を目指す社会的すう勢のこの10年間の間に、民衆は彼らの生活を自分自身から疎外するものとしてし

まったのである。このことを通して、あるいは、あらゆる既存の変革を産みだしていくことに失敗することを通して、なぜ人種差別主義者や性差別主義者の暴力が増加しているのかといった状況が明らかになってくるのだ。この残忍な社会に無自覚で鈍感な感覚のまま日常生活を送らせるテクニックはこの内にある。

日常的に私たちはだか共通的課題に取り組む様々な潮流からなるグループや、諸問題を自らの課題としてこれと闘うグループが創出されなかったため、破壊的かつ自滅的な勢力が登場し、ファシストが台頭しはじめるといった現実が、今この社会で起こっているのだ。人民自身が新たな社会闘争を進展させていくのか否かは、カネの力によって押しつぶされることを拒否する人民自身の決定に委ねられている。ここに我々は社会的な反権力潮流創出の可能性を見いだすのだ。

しかしながら、これを展開していくことは、変革をめざして闘う全世界の人々、抑圧下に置かれている全ての人々に対して、我々が負っている責任の一部でもある。大ドイツ帝国の世界支配に対する闘いがドイツ帝足下で闘われていないことにとられるよりも、むしろ人々との連帯を表明したり、支配権力と対決せんとする社会的意識が存在しているのだというふうにとらえ、認識するのは、我々自身にかかっているからである。

我々は、人々が本当の社会的展望を見いだすことができ、資本主義システムが無価値であるのだということを認識できる新たな社会運動を開始していかなければならない。そしてそれは、人間的価値の根本問題なのである。

(5 ページよりつづく)

○3月22日／イズミール

パトカーへの武装攻撃。対テロ特殊部隊2名が死亡。

○同日／イスタンブール、ブルサ

カルサンバ署など警察署2ヵ所に対するロケット弾砲撃戦闘。建物を完全破壊。警官重傷者多数。

○3月23、24日／イスタンブール、アンカラ、アダナ

警官に対する銃撃戦闘。1名死亡、6名を重傷に。

○3月25日／イスタンブール

トルコ情報部MITのバスに武装攻撃。死亡2名、重傷5名。

今回掲載した4・17虐殺事件は、これら一連の戦いに対するトルコ国家の報復、反動攻撃としてなされたものである。この日、イスタンブール市長は次のようなコメントを述べた。

「今回のような掃討作戦をあと2、3回おこなえばデブ・ソルは一掃されるであろう」

トルコ政府は対テロ治安維持法(第141、142条)を発動し、デブ・ソル、PKKなどの革命的左翼に対し、むきだしの軍事弾圧攻撃を加えている。

今年1月にはトルコ治安法廷で、デブ・ソルメンバー16名に死刑判決、14名に最高25年の重刑攻撃がかけられるなど、トルコ、クルディスタンでの闘いは重要な局面を迎えている。

「革命以後」のものとして据え置かれていい問題ではない。新たな内実と価値をもった運動、これこそが具体的変革をもたらすことのできるものである。

※

※

我々は4・10声明をもって、非常に長かった我々の歴史の一局面にピリオドを打った。これは我々が下した決定である。我々には、我々の側の反省のプロセス、そして我々の目指すべき指針の再設定のプロセスを認識する必要があったからだ。これは国家とは何の関係もない。

国家権力はあらゆる手段をもって、RAFそしてRAFの獄中者、あるいは我々の22年間の闘いを抹殺せんとしてきた。権力はこれに敗北した。これを自らの心の内に抱きつつ、我々は新たな局面へと歩みを進めることにしたのだ。もし権力がこの新局面において妨害を企てようとするのなら、これに対していかに反応するのかを決定するのは闘う者全てが決定することである。またこれによっていかなる事態が生じようとも、我々は責任を負いはしない。

我々は新たに構築されるプロセスの重要な要素は、投獄されている同志たちを解放する闘いでなければならぬと宣言した。何年もの闘いの結果として、彼ら獄中者の自由は政治的解決を通してもたらされるものであると宣言するのである。

おおかたの釈放の見通しのある者も含めて、すべての政治囚の解放とは、唯一、闘争のプロセスを通じてのみ成し遂げられるのである。これは、拷問を許さず獄中者の自由を勝ち取るためのイニシアチブと、そして闘争とを獲得せんとするすべての者の労作とならねばならない。

我々は、獄中の同志たちの、そしてあらゆる解放闘争の獄中者の現実的な人生を考慮し、探究しているのである。我々はすべての人々のために、正義のために、そして人間的存在をかけて全世界の抑圧された人々のために闘う者すべてに対し、これを提示していきたい。

Rote Armee Fraktion 1993.6.29

〔訳註〕ローベダー暗殺

1991年4月1日、ベルリン信託公社総裁／東独復興担当投資顧問であったデトレフ・コルステン・ローベダー(元ドイツ経済省事務次官)が、RAF／ウルリッヒ・ヴェッセル・コマンドの攻撃で車ごと爆破され死亡。RAFの攻撃としては最後のものとして記録されている。

世界の革命運動の情報紙

 **BURST CITY**
For Revolutionary Resistance

★発行 ARP

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★定期購読料 10号分 2500円 本号 200円